

第41回 大阪の医療と福祉を考える公開討論会 がん医療の現状と展望

第41回「大阪の医療と福祉を考える公開討論会」を10月22日午後、大阪府医師会館で開催しました。今回は「がん医療を考える——その知識、本当ですか？」を



茂松会長

テーマに意見を交わしました。第1部は、当日は古川圭子・毎日放送アナウンサーが司会を務め、初めに茂松茂人会長があいさつ。がんの治療を継続しながら、「どのように社会生活を過ごすのか」といった新たな課題だと述べました。その後、今村文生氏（大阪国際がんセンター副院長）、片桐修一氏（市立豊中病院顧問）、栗山隆信理事、阪本栄理事が意見を交換しました。

治療する側の立場から——今村氏



最新の治療として、分子標的治療と免疫療法などを解説され、今後とも優れた治療法が登場するのではないかと期待を示しました。一方で、▽すべてのがん患者に恩恵があるとは言えない▽治療には副作用がある——などの課題を示し、自己の決定が大切になると述べられました。

患者の立場から——片桐氏



ご自身のがんの発見から治療までをお話しされました。そして、助言になればと、▽知り得た知識だけに頼らず主治医に心を開くことが大切▽最善であることを願いつつ最悪に備える——などと述べられました。

治療費・健康保険制度について——栗山理事



がん医療に関して、治療費の観点から説明され、公的保険を適用した場合の一部負担金や高額療養費制度、介護保険制度などを解説しました。

治療と仕事の両立やACPについて——阪本理事



がん患者の3割は20歳から64歳で、「治療と仕事の両立」が大きな課題だと指摘し、行政の支援や雇用主の理解が不可欠と訴えました。また、ACPを概説するとともに、がん検診を受けてほしいと促しました。